

もくじ

吉祥図をあしらった大型舞台幕 1P
鹿浜での子どもの生活 最終回 3P

舎人能満寺と将軍家の御茶屋跡 2P
博物館資料 4P

足立史談

第571号

2015年9月15日

足立区教育委員会
足立史談編集局
足立区立郷土博物館内
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562
(27-308)



花間屋が贈った舞台幕 本木高野の花卉栽培の隆盛を物語る 404cm × 243cm

吉祥図をあしらった大型舞台幕 本木高野の神楽資料から

郷土博物館

生業と郷土芸能

今夏、扇三丁目町会（会長・榎本武巳さん）から神楽資料が博物館に寄贈されました。木箱二つに神楽面・衣装そして大型舞台幕が収められていました。

扇三丁目はむかし本木村東高野といい、隣接する高野村と区別するために本木高野（もときこうや）という名前もありました。

※ 以下資料に即し、今回は「本木高野」という表現を用います。

現在、本木高野では郷土芸能の保存団体は失われていますが、昭和六〇年ごろまでは、名人の榎本長蔵さん（屋号「ヤネヤ」）を中心にお雛子や神楽を奉納していました。

長蔵さんは働き者で花卉栽培では遠く駒込や四谷の花市場まで出荷したり、小台で花屋を出したほか、榎の切り出しと出荷を行っていたそうです。

扇三丁目の時代になっても郷土芸能は続けられ、町内の空き地で三番叟等を奉納されていたそうです。

大型舞台幕

本木高野の寄贈資料で目を引くのは舞台で用いられた幕です。贈り幕



市場贈の舞台幕 五一七cm × 二八九cm

とも称される舞台幕の一種です。いずれも出荷先のごひいき筋の間屋衆から寄せられ、祝い幕、贈り幕という表現もあります。

上段の大型舞台幕は、花屋（花間屋）から贈られたもので、三ノ輪の花初ほか四件から贈られています。大きく「あばれ鬘斗」を背景に松竹梅と折鶴があしらわれています。梅柄の中央に「本」と「高」の合字が本木高野を表現しています。

今後考古学的検証の機会を待たねばならない。

舎人御茶屋については未解明な点が多い。『徳川実紀』に舎人御成の記録は見えず、御茶屋の存続期間は確定できない。また八幡社境内跡の面積は一七四坪(約五七五㎡)に過ぎないが、これはあくまで御茶屋のごく一部と考えられ、御茶屋全体の敷地の規模範囲、建物の規模構造は依然不明である。

八幡社を管理していた能満寺は同社至近の真言宗寺院だったが、こちらも神仏整理政策により明治六年(一八七三)廃寺となった。能満寺については、元禄八年(一六九五)検地での検地役人の拠点のひとつで、地域の名門新井家・斎藤家が元檀家と古文書から判明する程度で、地域における同寺の役割も不明である。将軍家御茶屋の存在は原史以来の舎人地域史を彩る重要な史実のひとつであり、今後舎

廃寺ファイル④ 一廃能満寺一
山号院号：密雲山閻持院
宗派：新義真言宗
廃寺年：明治6年(1873)3月
本寺/寺格：円通寺/孫門徒
境内地：舎人町字下村1378外
本尊/持神社：虚空蔵菩薩/御殿山八幡社

徳川家康・秀忠・家光三代治世(17世紀前半)の鷹狩関連地名表—足立区域

町村名	鷹狩記録	御茶屋	鷹場令触村	御成	関連小地名	備考
梅田	-	-	-	(家光)	—	関連寺院：明王院
嶋根	○	○ (安穩寺内)	-	秀忠・家光	御成橋、御成道	御茶屋造営は家光治世? 酒井忠勝も鷹場利用
千寿	○	○ (勝専寺内)	○	(家康・秀忠) ・家光	御馬屋堀、御殿地、鶴田、鶴寄場	御茶屋造営は家光治世? 慶安2年御殿に改築、勝専寺内に東照宮勧請
竹塚	-	-	○	-	鷹番橋	
舎人	-	○	○	(秀忠・家光)	御殿、御殿山、鷹場橋(入谷村)、鶴見(古千谷村)	御茶屋跡に八幡社勧請。
沼田	○	-	○	家光	—	関連寺院：延命寺(または恵明寺)
花又	-	-	○	(秀忠・家光)	—	関連寺院：実性寺?

人御茶屋のさらなる解明が期待される。

【主要参考文献】

- 足立区『道路台帳現況平面図』/『旧土地台帳』、『旧土地台帳附属地図』(以上東京法務局城北出張所所管) / 『社寺上下渡願書(第十大区五小区)』、『社寺取調帳(埼玉県)』(以上東京都公文書館蔵) / 『新編武蔵風土記』/ 『徳川実紀』/ 『足立区立郷土博物館(編)』、『足立風土記稿—地区編④ 舎人』/ 『岡田茂弘他』『近世初期における将軍家御殿・御茶屋跡の考古学的研究(科研費研究成果報告書概要)』/ 『加藤敏夫』『舎人の語り伝え⑥ 御殿山』(『足立史談』二七二) / 『品川歴史館(編)』『品川を愛した将軍徳川家光』/ 『舎人を語る会』『郷土舎人』/ 『中島義二』『徳川将軍家御殿の歴史地理的考察二』(『駒沢地理』一四)、『同』『御殿と御茶屋』(『季刊地域』二) / 『根崎光男』『将軍の鷹狩り』/ 『森朋久』多田文夫『永野家文書—検地帳—解題』(『足立風土記資料 古文書史料集—永野家文書二』) / 『一』

(刈江の歴史研究会)

鹿浜での子どもの生活 終
小川 誠一郎
犬と猫 実家にはシロとトラがいた。大谷さんからきたシロは、白に赤、黒が少し混じった可愛い犬だった。叔父が蔵の軒下に犬小屋を置いたが、門の外まで見通しが利く、母屋やの軒下に寝そべるのが好きだった。猫のトラは屋敷全域が縄張りのように、古飯に味噌汁をつけてやるとどこからともなく顔を出した。他所者の往來の少ない島の集落では、あまり防犯は気に掛けないのか、犬や猫も広い家屋敷に居ついて、穏やかだった。「うら」の家は、門の近くへ行くと、大きな赤犬のジロがすぐやって来るので怖かった。子供達には周囲の視線や空気を敏感に感じ取り、気楽に遊べるどころか集まり、とくに簡単な門構えの垣根もはつきりしない、開放的な家の庭は理想的な遊び場だった。家人が顔を見せても、小言を言われることはめつたに

【凡例】狩記録・『徳川実紀』に将軍家鷹狩来訪の記載がある町村、鷹場令触村：寛永五年(一六二八)鷹場令の触村、御成：○内は縁起・由緒書・伝承でのみ確認できる人物、関連小地名：十七世紀前半由来の呼称とは限らない。【出典】『足立区文化財調査報告書3』、『足立風土記稿—地区編1—10』、『大川系図』、『旧考録』(永野家文書)、『勝専寺』御由緒書(高田家文書)、『浄土宗寺院由緒書』、『正保武蔵国絵図模写図』、『新編武蔵風土記』、『東武実録』、『徳川実紀』、『明王院縁起』

なかった。

家畜 鶏を放し飼いにしている家が多く、鬮鶏用のシヤモや卵が美味のチヤボも趣味で飼われていた。シゲさんが鶏をつぶすのを皆で囲んだことがある。古顔の雄鶏を素早く捕まえて来て、首を切ってから、羽毛をむしり、手なれた包丁さばきで臓器と肉を切り分け、いちいち説明しながら大皿に盛り付けて行った。「となり」にはヤギがいた。高価な粉ミルクがそれほど普及せずとくに入手困難な時代、乳の足りない産婦は赤子の授乳に乳母の手を借り、また牛乳やヤギの乳を与えた。農家では飼育の楽なヤギが好まれた。「どぶ」の家の田んぼでは、重いスキ鍬を引きずり、泥土に足を取られながら歩む牛の姿が眺められた。

「どぶ」は近い親戚のようで、おばさんが実家へしばしば顔を見せた。三、四歳年長のヨッチちゃんは「ひきわりや」のトキちゃんと同じく、江北小学校へ通っていた。年齢的には、遊び仲間の集りから巣立った兄さん格、きつと遠くから見守っていてくれたのだろう。時に目を合わすと身内を自任する親しげな心の内が感じとれた。ところで、近所で椿分校へ一緒に通った者はいなかった。島における低学年児童の教育現場は、かなり近県(埼玉)への越境通学の流れ、子供達は分かれていた。

こうした状況はとくに問題視されることはなかったようだ。子ども心に思い当るふしは、本校の江北小学校へ通学すると、椿の三倍も遠くなるからなあ……くらいだった。

鹿浜を去る 家族と別れ、祖母と一緒にの三年生の残り半分はすぐに経ち、四年の新学期へ向け新宿へ戻る日が近づいた。椿分校は休み中、佐藤先生や友達に改めてお別れができなかったが、夏休みに鹿浜を訪れ、また再会できるだろうと軽く考えていた。上沼田まで自転車の荷台に乗せてもらい、後は一人で王子行きのバス、飛鳥山から早稲田行きの都電、そして新宿駅行きのバスへと乗り継ぐ、二年半前母と来たルートを逆に辿るだけだ。心配の種はバス停が変わっていたら? くらい、来た時と同様身一つで、携える物は、下敷に使えるかな? と叔父が届けてくれた国防色のセルロイド板、祖母が浅草寺近くで買ってくれた拡大鏡など、想い出の小物類、新宿での再出発で頭は一杯になっていた。ビー玉やペーゴマはいつの間にか消えていた。糸のついた釣り竿だけを未練がましく軒下へ押し込み、シロともお別れだ。**疎開を振り返って** 二年半の鹿浜における縁故疎開は、祖母一家との農家の日々と、新宿を焼け出された家族との日々が相半ばして、物心つく時期の得難い生活体験となった。大

人には、明日の生き死にも不確かな、全く先の見えぬ厳しい時代だったが、田舎の子供達は外へ遊びに出れば、身近に迫る恐ろしそうな事なんか気にもかけず、しがらみから解放され、心の赴くまま自然な住・遊空間へ飛び込めた。自分の心身を守ることに全く一番大切、明日の心配などせず、自然に身を任せて行くだけの、したたかな生活姿勢が育まれたようだ。鹿浜の自然と生活環境との出合いは、悲喜(こもこも)に至り、真に恵まれたものだったとつくづく思う。

むすびにかえて

椿分校所は、昭和二四年に鹿浜小学校として独立したので、二年ほど机を並べた同期生達の中の一部は、江北小学校(本校)へ転校せずに、ここの卒業生となっているはずだ。二年前、本校で資料の閲覧をお願いした際、要領を得なかったのは、その辺の事情もあつたのかと気付いた次第です。連載を終える前に鹿浜小学校を訪ねようとしたが、ちょうど校舎を建て替え、鹿浜五色桜小学校として生まれ変わる時期にぶつかり、資料類はすべて倉庫に保管中と伺った。近い将来見せていただくのを楽しみにしています。長い間連載を応援して下さい。鹿浜二丁目在住の榎本八重子氏に感謝

します。氷川神社の鹿浜獅子舞もご案内いただきました。

(慶応大学名誉教授)

※ 五三五号(平成二四年九月)から連載いただき、挿絵として描いていたいただいたスケッチは当館紀要三六号で「北鹿浜町の記憶画」として詳しく紹介しています。(編)

~~~~~  
ここで見て足立の博物館資料

## 書店や図書館で出会う本

博物館の収蔵資料を用いたテレビ番組や刊行物があります。郷土博物館では規定に基づいて「資料特別利用」という制度があり、本の挿絵やテレビの参考画像などでご利用いただけます(HPをご覧ください)。書店で出会う出版物の表紙を飾っている場合もあります。直近の予定では、浮世絵師・二代歌川国貞とその弟子・国周を描く梶よう子『ヨイ豊』(四六判・講談社、一〇月二〇日発行予定)や新選組隊士齋藤一の物語、中村彰彦『明治無頼伝』(PHP文芸文庫、九月二二日発行予定)があります。いずれも足立区の歴史とも関連する本です。

足立の郷土史でも新刊がお目見えしました。足立史談会の安藤義雄さんが足立法人会だよりで連載した記事をまとめた『語り伝える江戸から今へ』です。足立区郷土史料刊行会。九月一〇日刊行。B6判、三六二頁。